

## アダム・スミスの防衛論

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 榎並 洋介   |
| 雑誌名 | 星薬科大学一般教育論集   |
| 号   | 20  |
| ページ | 25-62   |
| 発行年 | 2002  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1240/00000217/">http://id.nii.ac.jp/1240/00000217/</a> |

# アダム・スミスの防衛論

榎並 洋介

## 一 はじめに

### 二 『グラスゴウ大学講義』の軍事論

#### (一) 国防の必要性和市民的自由

#### (二) 分業社会と国防意識

### 三 『国富論』における国防論

#### (一) 常備軍及び民兵と自由

#### (二) 教育と武勇の精神

## 一 はじめに

アダム・スミスは、自著『国富論』第四編第二章において、国防 defense は富裕 opulence より重要であると主張する

ことによって、航海条例を支持したのであった。<sup>(1)</sup> 航海条例は、輸入品に対する高率関税やそれら輸入品の販売を規制する内容をもったものであって、それは経済活動を阻害し、経済発展によって生まれる国富の増進を阻止する意味あいを有するものであった。このような特質をもつ航海条例を支持することは、資本活動の安全と資本蓄積を推進するための軍事的条件を国家が支援することを意図し、この政治的軍事的条件を契機にして一国の富裕の実現を保障していくということを意味する。このことは、まさに、スミスにとって、「国防は富裕のために重要であると書き改めなければならない」状況であったといえよう。<sup>(2)</sup> しかも、この状況は、軍事力の強化を視野においた国際競争場裡における一国の安全保障を考慮に入れたものであり、スミスが軍事産業奨励政策などを肯定的に評価していたことを意味するものである。<sup>(3)</sup>

スミスが国防は富裕より重要であると主張するとき、この国防の形態に関して、『国富論』のスミスは常備軍の優位を認識しているが、『グラスゴウ大学講義』のスミスは民兵を重視していて、『国富論』のスミスと『グラスゴウ大学講義』のスミスとの間には考え方に变化があるのではないかという解釈がある。また、他方では、両者の間の見解には変化はないという解釈もある。これらの諸解釈をわれわれはどのように理解すべきなのであろうか。

ところで、『国富論』出版後の一七七六年四月一八日付の手紙でアダム・ファークスはアダム・スミスに次のように書いている。「貴兄は教会や大学や商人を怒らせるようなことをいっていますが、これについては小生も喜んで貴兄の味方をしようと思います。しかし貴兄はさらにすすんで国民軍 *militia* の気にさわることをいいました。ここでは小生は貴兄に反対しなければなりません。この国の地主や農民が万一の場合——それはさほど遠くないところまで迫っているのではないかと思います——無為にすごし、彼等のうちに蔵せられているあらゆる資質をないがしろにしているというならば、なにも学者の權威を借りる必要はありません。このことは、いざというときになれば一層そうです」。<sup>(4)</sup> これは、スミスが『国富論』において、民兵軍と国民軍に対して、常備軍が、歴史的に照らしても圧倒的に優位に立っていることを例証したこ

とに対するアダム・ファergusンの厳しい反論である。スミスは、「一七八六年に設立された第二ポーカークラブには加わらなかった。この兩年の間に、彼は『国富論』において、常備軍と国民軍との問題全体をきわめて注意深く検討したうえで、後者より前者のほうがはるかに望ましいと主張するにいたった」<sup>(5)</sup>のである。

しかしながら、スミスは一七八〇年十月のホルト宛書簡において、民兵軍について次のように書いていた。「国防にかんするパンフレットの匿名の著者、彼はダクラスという名の紳士であると聞いていますが、この人が私に対する反論を書きました。この本を書いた時には、彼は私の著作を最後まで読んでいなかったのです。彼は私が民兵はあらゆる場合によく規制され規律のゆきとどいた常備軍に劣ると主張しているがゆえに、私が民兵にまったく賛成していないと考えているのです。その主題に関しては、彼と私とは、まさに同一の意見をもつことになったのです」<sup>(6)</sup>。

一七六二から六四年の『グラスゴウ大学講義』以降、スミスの見解が変わったのか否かについては、一七六二年に設立されたエディンバラ・ポーカークラブとの関係は無視できない。なぜならば、このクラブは、「当時スコットランド国民をわきたたせていた公の問題、すなわちスコットランド国民軍創設の問題にかんして、とくに上層の人々のあいだに世論をかきたてる手段たらんとしていたからであった」<sup>(7)</sup>。スミスがこのクラブの創立者の一人として参画しているのは、なによりも創立の趣旨に賛同して参加していたはずだからである。ちなみに彼は一七七四年まで会員としてとどまっていた。一七七五年のアメリカ独立戦争の開始から一年後の一七七六年、『国富論』初版出版によって、スミスの見解は民兵論から常備軍の優位性という考え方に移行していくのである。<sup>(8)</sup>このことは、国際情勢の変化に対応して、分業の進行を原理とした商業社会の発展が、平時あるいは戦時を問わず、分業によって專業化した兵士に文明社会の防衛を託するという時代の流れを反映したものと解すべきことなのであるうか。

だが、常備軍の優秀性についてのスミスの言明にもかかわらず、スミスは民兵制を支持しつづけていたのであって、『国

富論』と『グラスゴウ大学講義』の間に変化はないという解釈もある。とくに、両書の対応を関連づけて、スミスは常備軍によってしか社会の防衛や安全は保障されないとしているが、しかし、彼はそうに言明した上でなおかつ、市民一人一人が武勇の精神、つまり軍人精神をもっているところでは、その精神が、常備軍によって侵害される可能性のある自由に対する危険性を、必ず大幅に減少させると明言していることに注目する。そして、この見解は、国民大衆の武勇の精神を国家の義務として公的教育の場で涵養し、その費用は公費によって賄うというスミスの強い主張を高く評価し、軍事論と教育論の相補関係を強調することによって、スミスの論理に一貫性を見い出そうとするのである。<sup>(9)</sup>

本稿は以上の諸解釈を念頭において、『グラスゴウ大学講義』と『国富論』とに開陳されているスミスの軍事に関する学説が、時代の流れを敏感に反映して変説したのか否かを考察しようとするものである。<sup>(10)</sup>

## 註

- (1) An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations by Adam Smith. Edited, with an introduction, notes, marginal summary and an enlarge index by Edwin Cannan. in two volumes, the sixth edition. London, 1950. II. pp. 23-24. 頁数に関しては、特に断らない限りキャンナン版の頁を表記する。以下、Wealth of Nationsと略す。大河内一男監訳『国富論』一九七六年、中央公論社版Ⅰ・Ⅲ巻本を使用する。Ⅱ、二二〇頁。
- (2) 高島善哉『アダム・スミス』岩波書店、一九六八年、九二頁。
- (3) 『国富論』は、帆布や火薬などの輸出奨励金、また国防産業への課税など是不合理であるとしている。Wealth of Nations, II 429. 訳Ⅱ一三六頁。拙稿「アダム・スミスの北アメリカ植民地発展論」『星薬科大学一般教育論集』第一四輯、一九九六年、五一頁。和田重司『アダム・スミスの政治経済学』ミネルヴァ書房、一九七八年、一五七頁。高島善哉『アダム・スミス』岩波新書、一九六八年、九二頁。水田洋「スコットランド啓蒙とアダム・スミス」『経済系』（関東学院大学）一一〇集、一九七六年、のちに、高島善哉・水田洋・和田重司・田中正司・星野彰男・伊坂市助編『アダム・スミスと現代』同文館、昭和五二年、所収、一〇七頁参照。
- (4) *The Correspondence of Adam Smith*, edited by E. Campbell Mossner and I. Simpson Ross, Oxford, 1977. pp. 193-194. Letter 154. 18 Apr. 1776. 以下Corr.と略す。
- (5) *Life of Adam Smith* by John Rae [1895] with an introduction "Guide to John Rae's Life of Adam Smith by Jacob Viner,

- Augustus M. Kelly, 1977, p. 137. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店、昭和四七年、一六七～一六八頁。
- (6) Corr. p. 251. Letter 208, 26 Oct. 1780. 後述することであるが、スミスは『国富論』の最後の篇において、武勇の精神の必要性を教育によって涵養することを主張し、いわば文明社会における富と徳という両義性の社会的意義を強調する。
- (7) John Rae, *Life of Adam Smith*, London, 1895, p. 135, 訳一六五頁。また、ボーククラブに関しては同書を参照。なお、スミスが常備軍を補完するものとして民兵制度を支持したことについては、R. B. Sher, *Church and University in the Scottish and Enlightenment*, Edinburgh, Univ., 1985, p. 261, を参照。
- (8) 『法学講義』の時点では、社会の発展の趨勢として、兵役形態は常備軍にならざるをえないことが指摘されていたが、常備軍そのものの積極的な長所はとくに認められておらず、むしろ事物の自然（の経路）によって生じてくる常備軍の欠点に言及されていた。常備軍にみられる勇気も強制されたものであるにすぎず、国防という観点からは、民兵の長所のほうに力点が置かれているように思われる。これは、当時のスコットランド民兵論の高まりと無関係ではありえないであろう。これに対して、十数年後の『国富論』においては、軍律正しい常備軍はいかなる民兵にも優越するといふ観点が、軍事力の面からも勇気の面からも全面におし出される」（篠原久、『アダム・スミスと常識哲学』有斐閣、昭和六一年、一五七頁）。また、John Robertson, *The Scottish Enlightenment and the Militia Issue*, Edinburgh, 1985, pp. 81-82 は、「常備軍と民兵との補完関係を重視する一八世紀半ばの民兵論争の推移、これを反映させるブリテンの戦略上の変化を論じている。
- (9) 「スミスの立場は誤解されてきた。常備軍の優秀性についての、スミスの言明にもかかわらず、スミスは民兵を支持し続けたのである。だからスミスの見解は、『法学講義』と『国富論』との間で変化を受けたとは思えない」Donald Winch, *Adam Smith's politics*, Cambridge, 1978, p. 106. 永井義雄・近藤加代子訳『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房、一九八九年、一二九頁。また、「スミスは、ふたつの視点を区別したうえで、防衛上は常備軍が、教育上は民兵が、のぞましいという」水田洋、スミスとファーガソン、『経済系』関東学院大学、一一〇集、一九七六年、一九頁。のち、高島善哉・水田洋・和田重司・田中正司・星野彰男・伊坂市助著『アダム・スミスと現代』所収、同文館、昭和五二年、二〇一頁。
- (10) さらに、また、次のような解釈もある。すなわち、スミスが「民兵支持から常備軍支持へ移行したとは単純にはいえず、詳細に検討すれば、民兵支持論と常備軍支持論が両テキストに並存していることがみいだせるように思われる」（田中秀夫『国富論』におけるスミスの国防論『経済論叢』（京都大学 第二五一巻第一・二・三号、一九九三年、のち、『文明社会と公共精神』昭和堂、一九九六年、所収、九八頁）。

## 二 「グラスゴウ大学講義」の軍事論

### (一) 国防の必要性と市民的自由

アダム・スミスやデーヴィッド・ヒューム等が会員であつたスコットランド啓蒙の有名な協会である選良協会 Select Society は、一七五四年に設立されている。ここで議論された主題は、スコットランドの国防、とくに傭兵、常備兵、民兵などの兵士に関するものと国民の平和などである。これらの議題は一七五五年から五九年にかけて集中的に議論されている。すなわち、一七五五年四月「ブリテンの臣民を傭兵として海外の兵役に派遣することは、健全な政策と一致するか否か」。同年、七月「常備軍と適正に規制された民兵のいずれかが、ブリテンにとって最も有利であるか」。一七五六年、二月「民兵もしくは水兵は一生涯軍事に従事すべきか、もしくは一定年限だけ従事すべきか」。同年、三月「戦時体制の国民と平和体制の国民は、どちらが最も幸福であるか」。一七五九年、二月「商業精神と軍事精神とは、同一国において、両立しうるか否か」。同年、十一月「ヨーロッパの現状において、一国は常備軍なしに存続しうるか否か」<sup>(1)</sup>。スコットランドにおける戦時体制及び平和時の軍事精神及び商業精神と軍隊の態様をこの協会で集中的に取上げ議論しているには、わけがあった。すなわち、一七四五年のスコットランドにおけるジャコバイトの反乱、及び一七五六年からのブリテンとフランスとの間の植民地争奪をめぐる七年戦争などが時代的背景として存在していたからである。

このような時代の風潮を受けて、スミスは、もし、戦争状態になれば、個人の財産は安全でなくなり、社会の安全も確保できず、国家の存在が危うくなる。この事態を防ぐために軍隊が必要であると、外敵から国家を防衛することによつ

て、諸個人の財産を保全し、安全保障を確保しなければならない、と考える。この目的のために、戦力や軍隊や統治の態様などを考察していかなければならないというのである。すなわち、彼は、一七六二から六三年の『グラスゴウ大学講義』において次のようにいう。「国内平和がそれほど堅固に確立されていないのに、そのうえもし、外国による危害からの安全保障がないならば、個人の財産は安全であり得ない。この点に関して諸個人にとっての危険は、自分たち自身の社会による侵害に劣らず恐るべきものである。そして私人の安全ばかりか、まさに国家の存在が危機にさらされている。だから軍隊が維持される必要があるのは、加えられた危害のいかなるものにも賠償を得るためであり、また対外的危害から国家を防衛するためである。この問題を論ずるにおいては、古代および近代の諸国家で使用されてきた多様な種類の戦力、様々な種類の民兵および訓練された軍団が考察されるべきであらうし、またそれらが、様々な性質の統治にどの程度適していたかが考察されるべきである。」<sup>(2)</sup>ここには、諸個人の財産の保全が第一義であって、そのために国家が存在するという認識がうかがえる。個人の国家賠償請求権は、国家がその第一の義務である安全保障を損ねた時に発生し、軍隊はそのため必要であり、国家の防衛義務はその手段として位置づけられている。

スミスが国家の防衛を論ずる場合、初期未開の社会と土地の私有と身分に差別が生まれた階級社会とを区別し、その社会状態の変化に応じた兵役の考え方を展開している。初期未開社会、例えば、狩猟・牧畜民族では社会構成員全員が外敵の危害に対して反抗し対抗する。平時時にはチーフであった者がその戦力を保持した。少し私有が進み、身分に差がでると、国を護るのは名譽であるという価値規範がはたらき兵役義務は社会の最上層の人々によって担われ、土地の耕作はそれよりもっと賤しい階級にまかされるようになった。「国家がこうして名譽を重んずる人々によって防衛され、彼等がこの原理にもとづいてその義務をはたす場合には、訓練の必要は存在しない」<sup>(3)</sup>。国家の防衛には名譽の原理がはたらくので、名譽を汚したくない本能がはたらき、社会の最上層の人々には特に訓練は必要ないというわけである。しかし、分業



が発達してくると、国家防衛は手工業・製造業に従事する者から社会の賤しい最下層にその職分が任される。「手工業・製造業の改良が上層身分の配慮に値するものだと考えられたとき、国家の防衛は自然に下層の者の職分になった」<sup>(4)</sup>。そこに作用するものはスミスのいう食欲の本能、principle of avarice あるいは利益の原理または富裕と奢侈の原理である。「狩猟・牧畜民族にあっては、また民族が農耕へと進んだときでさえ、その全体が戦争するために出かけた。手工業・製造業が進歩し始めると、全体が行くことはできない。そしてこれらの仕事は骨が折れ、大きな利益があるわけでないから：最上層の者が戦争に行く。その後、商工業がさらに進んで、非常に利益が多くなり始めると、国家の防衛はもっとも賤しい者にまかされる」<sup>(5)</sup>。このように名譽の原理から利益の原理への変化がすべての社会の発展段階における兵役の形態を規定する。手工業・製造業の改良・発展が社会の必需品や便益品の供給を増加させる。さらに、商工業の発展によって、社会の利益が非常に増加してくると、社会的富を増加させる人々に対する社会の評価は高まる。スミスが利益や富裕や奢侈の原理が兵役の担い手の変化を呼び起こすと考えるのは、社会を構成している人々の共通の価値基準が商工業という産業の発展にあるとみているからであろう。かくして、労苦多く、利益少なく、生死の危険の多い戦争という仕事に従事するのは社会の最下層の人々だ、ということになる。しかしながら、産業の発展を背景とした国家防衛に対する富裕層と貧困層の役割の相違は、社会規律としての意味をもつため、国民の自由を拘束するという問題に発展しないのであろうか。

スミスは社会構成員全員が戦争に出かけたときは、軍規の必要はあり得なかったという。規律が不要であった理由は、戦闘員全員が共通の目的を充分認識していたし、また戦士の戦う技術や知識などの戦うための資質が同じ水準にあったからである。「全体が一緒に出征したときには、軍規 military discipline の必要はあり得なかった。彼等はすべて、いわば同じ水準にあり、彼等の共通の目的はよく認識されていたので、規律は全く不必要であった」<sup>(6)</sup>。この場合には軍の規律は必要なかったし、また、社会の最上層の者が出征した場合には、名譽の原理が規律の役割を果たした。常備軍 standing army

の中に軍規が導入されたのは、最上層の職務を最下層の人々が代行するとき、軍を統制するために厳格な規律が必要になり、權威の原理で全体を統率するという方法をとることになったからである。スミスは、士官達の命令や軍法違反に対する嚴罰が恐怖となり、それが原理的に作用し、その結果として、戦場においては勇敢な行為や良い行動がくり返されるという。「一般に、彼等が、敵よりも自分達の將軍や士官を恐れるほどの、權威の下におかれることが必要である。彼等の士官達と軍法 martial law の嚴罰への恐怖が、彼等のよい行動の主な原因であり、彼等の勇敢な行為はこの原理のおかげである」と考えるのである。<sup>(7)</sup>

士官達にそむくことができない畏怖の原理こそが常備軍の抱える問題点であるが、しかしこの原理が勇氣の基礎であると考ええるスミスは、その恐怖觀念が拡大するどのような影響がでてくると考えるのであろうか。自由との関連で極めて重要な課題になると思われる。

スミスは、常備軍が存在しないと簡単に侵略されてしまうという。常備軍が必要であることを彼は否定しない。むしろ、常備軍について考えなければならない重要な点は、「それがもっとも便利な方法で、できるだけ国を害さぬように、あつめられなければならないということである」という。国民の自由を侵害しないで、兵士を徴集するにはどのような方法があるのであろうか。これに関して、彼は、次のようにいう。「常備軍がいかに非難を受けようとも、社会の一定の時期にはそれが導入されなければならない。国の公職を有する土豪 landed gentleman に指揮されている国民軍 militia が、何人かのためにその国の自由を犠牲にするとは決して予想され得ない。そのような国民軍は、疑いもなく、他国民の常備軍に対する最良の防衛であろう」。<sup>(8)</sup> 常備軍はなぜ非難を受けるのであろうか？それは常備軍の導入は必要だが、常備軍は国民の自由にとって危険であるからである。他方、スミスは、土豪つまり地主紳士が指揮している国民軍 militia つまり民兵軍は、その国の自由を決して犠牲にしないだろうという。なぜそのようなことがいえるのであろうか。

その場合、スミスは常備軍を二種類に分ける。つまり、政府が特定の人々に職務を与え、この人々が徴集した傭兵に給料を支払う場合と、政府が軍隊を指揮する一人の將軍と一括契約を結ぶ場合とである。前者は常備軍の典型であるが、後者は国民の自由にとって危険なものであるという。それはどうしてか？「政府は、手工業がまだ発達していない地域の首長と契約する。そして士官達はすべて彼に従属し、彼は国家から独立しているの、彼の雇主は彼の掌中にある。」<sup>(9)</sup>このことは、特定地域の首長にとって国家から独立した形の軍隊を形成することを可能にする。その軍隊の指揮命令系統は政府の及ばない範囲にあることもあり得るので、ひとたび国家に対する騒乱が勃発すれば、国民の自由を侵害することも起こり得る。だが、スミスの国では、士官達には名誉の原理が支配しているから、政府に対して武器を向ける恐れはあまりない。「しかし、なおある場合には、常備軍が国民の自由にとって危険なことが証明された。それは我々自身の国でおこったように、主権者の力に関する問題が議論されるにいたった場合である」<sup>(9)</sup>。ここにいる、ある場合に常備軍が国民の自由を侵害することが証明されたスミスが言っているのは、ピューリタン革命の指導者であるオリバー・クロムウェルが一六四〇年から六〇年にチャールズ一世によって召集された長期議会の議員を議会から追出し、彼自身が自分の意中の人を將軍に任命して、自ら全権を掌握したことを指している。スミスは、『グラスゴウ大学講義』の公法学篇第四節「いかにして自由は失われたか」において次のように言っていた。「我が国においても全く同様なことがオリバー・クロムウェルに関して起こった。議会がこの男を妬むようになり、その軍隊を解散したときに、彼はローマの將軍達よりもはるかに大きなやり方で軍隊に訴え、そして議会を追出し、彼の意中の人を任命して、自ら全権を握ったのである」<sup>(10)</sup>と。

スミスは、常備軍の国民の自由に対する危険性を歴史的事実に照らして主張しているのであるが、それは主権者の力に関する問題が議論された場合に起こることだ考えている。ピューリタン革命における王と議会との関係を念頭においてスミスは、その理由を「常備軍は、一般に、王に味方するからである」という。つまり、「兵士の本能はその指揮者への

服従であるが、王が彼を任命し給料を払うので、彼は王に対して奉仕の義務があると考える」。常備軍の君主に対する絶対的忠誠は、王の任免権とそれに対応した給料の支払額に基づく。恣意的な君主の存在が常備軍の性格や行動を規定し、そのことが大多数の国民の自由を侵害する可能性もある。このようなことは軍事的君主の配下にある常備軍だからおきるであって、「正当な国民軍 proper militia が建設されていれば、決してあり得ないだろう」というのである。<sup>10)</sup> 国民軍 militia とは民兵軍のことであると理解するならば、『グラスゴウ大学講義』のスミスは、国民の自由を侵害しない軍隊とは、民兵軍であると認識していたと解釈できるであろう。

しかしながら、土豪 landed gentleman (地主紳士) が指揮する民兵軍は国民の自由を危険にさらさないし犠牲にもしないということは、強制を伴わないで徴兵する制度に基づいた市民軍が国防軍としての役割を担うからであり、それは「各土地所有者に、地代収入の評価額におうじて兵員を調達させ、それで連隊をつくるという考え方」が基本にあるからである。<sup>12)</sup> 土地所有者は地主紳士であり土豪であると解すれば、土豪の指揮する民兵軍は国民の自由にとって危険なものではあり得なくなるという考え方が生まれてくる。かくして、スミスはこのような特質をもつ国民軍Ⅱ民兵を最上の軍隊と考えているといえるのである。

## (二) 分業社会と国防意識

もう一つの課題である分業の発達が起点となって手工業や製造業が発展すると商業精神が優位になるとするばあい、そのことが国防意識つまり武勇の精神にどのような影響を与えるとスミスは考えているのであろうか。

スミスは、商業の精神から生ずる悪影響を三点挙げる。すなわち、それは、商業の発展が人々の視野 view を狭め、教育

を軽視し、武勇の精神を消滅させるといふものである。

第一の問題は、分業が発達すると社会が進歩発展するのであるが、そのことが人々の視野を制限するといふ。つまり、分業の進展は特定の種類の仕事に思考の全部を占有してしまうので、自分の職業以外の事物と比較する機会をもたなくなってしまう。その積み重ねは、当然なことながらその人間の視野を狭くする。部分的な視野は保持しているが、それは狭いもので、直接自分の仕事に関係ないわけであるから広い思考範囲を持つ必要性もなくなる。いわゆる分業が発達すると人々の心は狭隘になり、聡明さが欠けてくるといふのである。スミスは次のようにいう。「分業が完全の域に達しているところでは、各人はただ一つの単純な操作をおこなえばよい。彼はこの操作に全注意を局限し、したがって、それに直接関連のあるもの以外の観念が、彼の心に生ずることはほとんどない。心がさまざまな対象に用いられる場合は、それはともかくもひろがる」<sup>(13)</sup>。すべてのことを一人で行う人は、異なった種類の多くの対象に全部の注意をむけるから、視野が広くなる。例えば、田舎の手工業者などがそうである、とスミスはいう。反対に都市の手工業者、ピンやボタン製造の分割労働者などは、とくに分業が発達しているので視野が狭いという。スミスはこれを拡大して、商業が発達した国の下層民 low people は、極端に愚かであることは普遍的な原則であり、都市より田舎の人々の方が聡明であるという。したがって、当然、このことの矯正が次の課題になるわけである。

商業の発展による悪影響の第二は、それゆえ、教育の軽視に関することである。スミスは次のようにいう。「商業に随伴するもう一つの不都合は、教育が大いに閑却されることである。富裕で商業的な諸国民にあっては、分業がすべての職業をきわめて単純な諸操作に還元したために、非常に幼少な子供を使用する機会が与えられる」<sup>(14)</sup>。商業的地域の下層民の親は子供を早くから働かせ、稼がせるので、教育がなおざりにされる。少年に対する教育の不足と早期の就労は、子供が家計の一部を支えることになるので、父親の權威は消え失せてしまい、少年が成人になると、仕事が終われば、何もすること

がないので、必ず酒食に耽る。放蕩酒食以外になんらの娯楽をもたなくなる。スミスは、このような現状を賤しむべき状態であると把握し、彼等が思想や思索の主題をもてないのは、最大の不幸であるという。だから、「教育によって彼等は読むことを学び、そしてそれは彼等に宗教の恩澤をあたえる。このことは、敬神の意味から見た場合だけでなく、それが彼等に思想や思索の主題を与えることからみても、一大利益である」<sup>(15)</sup>というのである。

さらに、商業の発展は人類の勇氣や武勇の精神（軍事的精神）を消滅させる傾向があるという。これが第三の問題点である。スミスは次のように断言する。「国防は、他に骨折<sup>bone</sup>をもたない一定階級の人々にゆだねられ、そこで民衆のあいだでは軍事的勇氣が減少する。人々は彼等の心をいつも奢侈的技術に用いるので、女々しく卑怯になる」<sup>(16)</sup>。なぜそういえるのであろうか。また、そのような結論にいたった経過はどのようなものであろうか。分業が社会発展の原理として機能する大商業社会を観察すると、そのような社会は様々な職業に従事する人々から成り立っている。しかし、「彼等の各々は、その隣人の業務にほとんど通じていない。同様にして、戦争をすることもまた一つの職業となる。かくて、人はただ一部門の業務を学ぶ暇しかもたない。そして、あらゆる人に軍事的技術を習得させてつねにそれを実習させるのは、大きな不利益であらう」<sup>(17)</sup>。分業社会においては、人々は一部門の業務に特化することが一番効率がよく、費用も少なくて済む。戦争は戦争を専門とする職業に従事する軍人に特化するのが、技術の面でも費用の面でも合理的なものとなる。分業社会の構成員全員が軍事的技術を訓練しても不利益であるという。このような考え方は、費用の面からこの問題を分析しているスミスの姿が浮かぶ。だから、国防に従事しない人々には、軍事的な精神や勇氣が直接には必要なくなるわけだから、武勇の精神も減少してくるというわけである。代わりに彼等がもつ関心事は奢侈的なものを消費することに移行する。スミスはこのような人々の心の変化を「女々しく卑怯になる」現象として理解するのである。

民衆全員が参画する民兵軍は、分業を原理として発達した商業社会では不利益であるとスミスは考える。そうであるな

らば、彼は、この段階における軍隊は、職業軍人によって構成する常備軍の方が合理的であると認識していたと解釈することも可能であろう。しかれば、スミスは、なぜ、このような考え方に至ったのであろうか。「一七四五年、四、五千の無防備無武装のハイランド人が、この国の進歩した諸地域を、その非好戦的住民から何の抵抗をも受けないうで占領した。彼等はイングリランドに侵入して全国民を驚愕させたが、もし常備軍の抵抗がなかったなら、彼等は難なく王冠を奪い取ってしまったであろう」<sup>98</sup>。一七四五年の事件とは、スコットランドで起きたジャコバイトの最後の蜂起を指す。ジャコバイトとは、ジェイムズのラテン語の *Jacobus* にちなんで呼ばれているものであるが、一六八八年、名誉革命によって王室を追われ、フランスへ亡命したジェイムズ二世、その後継者ジェイムズ・スチュアート、その子チャールズ・スチュアートがスチュアート王朝の復活を願って支持者たちと起こした蜂起である。ジャコバイト軍の第一次蜂起は、一七一五年十一月プレストンで敗退、翌年二月にジェイムズはフランスに逃亡して失敗する。最後の蜂起はスコットランドだけでなくイングリランドの中心部まで及んだ。すなわち「一七四五年、七月二十五日、チャールズがスコットランドの北西、アウター・ヘブリディーズ諸島の一つに上陸する。政府軍の対応は遅れ、ジャコバイト軍は九月十一日にはエディンバラに進軍し、エディンバラはパニック状態に陥る。犠牲を最小限にするために市の防衛を放棄した市長のアーチボルド・スチュアートは職務怠慢の嫌で告発され、隠れジャコバイトの疑惑を受ける。さらに、反乱軍は同月二十一日にはプレストンパンズの戦いで政府軍を破り、イングリランドに進軍し、十二月四日には、ロンドンから一二五マイルしか離れていないダービーにまで攻め込み、ロンドンを一時パニック状態に陥れた。しかし、十二月二十五日にはスコットランドのグラスゴウに退却し、翌年四月十六日、インパネスに近いカロードンで、カンパーランドの率いる政府軍に完敗し、ジャコバイト軍は壊滅する。チャールズは、その後、半年ちかいさまざまな悲話を生んだ逃避行ののち、九月に、フランスに逃げ帰ることになる」<sup>99</sup>。スミスは、このようにジャコバイトの乱を引き合いに出して、常備軍が事実として、既存体制を防衛したことを確認し

ている。しかしながら同じ箇所でも次のようにもいう。「商業国は海外においては恐るべきものであろうし、艦隊と常備軍によって自己を防衛することができよう。しかしそれが負けた場合には、敵は国内に侵入してきて、容易にこれを征服する」。このように容易に侵略されるのは、「商業精神の短所で、人々の心は狭隘になり、昂揚することが不可能になる。教育は軽視され、または少なくとも閑却され、英雄的精神はほとんど全く消滅させられる。これらの欠陥の矯正は、真剣な注意に値する事柄であろう」といって、治政論第一七節の「風習に対する商業の影響について」を終わっている。分業の発達が人々に専門特化を促し、人々は日々直接利害関係のある自分の仕事しか関心をもたなくなる。隣人の仕事はほとんど理解できないので、外敵の侵入を容易に受け入れるのは、そのような知識や技術や心を喪失しているからで、何の抵抗意識もないからである。かくして、住民は非好戦的となり、武勇の精神という防衛的軍事的精神は衰弱してくる。しかし、この欠陥をどのようにして克服するのか。それは、教育によって矯正することを真剣に考えなくてはならない、とスミスは考えるのである。

## 註

- (1) J. Robertson, *The Scottish Enlightenment and the Militia Issue*. Edinburgh, 1985. pp. 85-86.
- (2) Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence: Report of 1762-63*. ed. by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, Oxford, 1978. 以下 L.J (A) と略記する。L.J (A), pp. 6-7.
- (3) *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student in 1763 and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan*. Oxford, at the Clarendon Press, 1896, p. 261. 以下 L.J (B) と略す。高島善哉・水田洋訳『ダラスゴウ大学講義』日本評論社、一九四七年、四六二頁。
- (4) L.J (B), *ibid.* 訳四六二頁。
- (5) L.J (B) *ibid.* 訳四六二〜四六三頁。
- (6) L.J (B) p. 262. 訳四六三頁。
- (7) L.J (B) p. 262. 訳四六三〜四六四頁。



- (8) LJ (B) p. 263. 訳四六五頁。
- (9) LJ (B) p. *ibid.*
- (10) LJ (B) pp. 29-30. 訳二一八頁。
- (11) 以上は、LJ (B) p. 264. 訳四六六頁。
- (12) John Rae, *Life of Adam Smith*. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店、昭和四七年、一六九～一七〇頁。なお、『国富論』が当時の政治支配層としての地主ジェントリの啓蒙書として執筆されたものであると解釈する論稿に、渡辺恵一『『国富論』における地主ジェントリー・重商主義批判の社会的基盤について』『京都学園大学経済学部論集』第二巻第二号（一九九二年）がある。
- (13) LJ (B) p. 255. 訳四五五頁。
- (14) LJ (B) p. 256. 訳四五六頁。
- (15) LJ (B) *ibid.* 訳四五六～四五七頁。
- (16) LJ (B) pp. 257-258. 訳四五八頁。
- (17) LJ (B) p. 257. 訳四五八頁。
- (18) LJ (B) p. 258. 訳四五八～四五九頁。
- (19) 天羽康夫『ファーガソンとスコットランド啓蒙』勁草書房、一九九三年、六四～六六頁。また、フランスのルイ一四世と僧王フランシス・エドワードのスコットランド侵略については、浜林正夫『イギリス名譽革命史』下巻、未来社、一九八三年、三八〇～三八五頁を参照。
- (20) LJ (B) p. 259. 訳四六〇頁。

### 三 『国富論』における国防論

『グラスゴウ大学講義』から十数年経過した後、この主題に関して、スミスは彼の名著『国富論』において、どのような考え方を展開しているのだろうか。スミスは、この主題を『国富論』第五篇の国家論において論じている。そこでは、民兵よりも軍律正しい常備軍の方が圧倒的に優れていることを歴史的に立証し、富裕な文明国民を防衛し、文明国を永続

させるのは常備軍だけであるという。富裕な文明国の民兵では貧乏で野蛮な隣国の侵略から国民を守れないというのが、その主な理由である。だが、常備軍にも問題がある。それは国民の自由にとって好ましいのか、好ましくないのかという点である。しかし、民兵の長所については論じられない。『グラスゴウ大学講義』で論じていた国民の武勇の精神の衰退という問題は、『国富論』第五篇第一章の教育論の箇所でも国民の武勇の精神の保持という視点で論じられているのである。

## (一) 常備軍及び民兵と自由

『国富論』第五篇第一章国家経費論は第一節を「防衛費」にあてている。国家の第一の義務は、軍事力 *military force* によって、他国からの侵略から自国民を守ることであるとした上で、軍事力を整備するための費用の観点から、スミスはこの問題を考察する。まづ、最末開の社会から文明の進歩した社会という社会の発展段階に照応して、主権者または国家が軍事費を負担するの可否かを論じる。狩猟民族は最低の最末開の社会であり、猟師は同時に戦士である。自らの労働で生活を支えているから、同じ生活を支える労働で、戦いに出かけたり、侵略に立ち向かうからである。このような社会状態では主権者も国家もないから、戦いにでる準備費や戦場での生活費について誰も経費を負担しない。狩猟民族よりも一段進歩した遊牧民族の場合にも、各人は皆戦士である。というのは、日常生活における日常の訓練、例えば、徒競走、組打ち、棍棒試合、槍投げ、弓などの訓練は戦闘のまねだから、実戦に役立つ<sup>1)</sup>。この場合にも族長又は主権者はどんな種類の経費も負担しない。唯一期待し要求する手当は、戦場にいる時の略奪のチャンスである。農耕民族においては、誰もが容易に戦士になる。それは日常の仕事と戦時の仕事が生きているからで、例えば、溝掘りは塹壕の中ではたらくのによく似ているし、農地の囲い込みは陣営の防備を固めるのに向いている。これら農耕の仕事は戦闘のまねごととして、スミスは捉

えている。このような社会で戦争に出る準備をするのに主権者又は国家は何の経費の負担もしない。では、なぜ、給与も支払われないのに戦争に出るのをいやがらないのか。それは、戦争が播種期の後に始まり、穫入れ前に終わるといような短期の戦闘である場合には、適齢の男子が戦場に出かけても、居住地は老人や女や子供が世話をするので、大きな損失にならないからだ、とスミスは考察する。

さて、もっと進歩した文明社会においてはどのようなことが言えるのであろうか。いままで簡単に述べてきた未開の社会では戦争に出かけても従軍者は自前で食べていけたけれども、文明社会ではそれが不可能になってきた。その原因は、製造業が発達し、戦争技術が進歩したからである、とスミスは考える。すなわち、「住民の大きな部分が、職人と製造業者であるような国では、戦いに出る人々の大きな部分がこれらの階級から引き抜かれなければならないから、かれらが軍務についているあいだは、国家がかれらを養ってやらざるをえない」<sup>(3)</sup>。農耕民の場合は、戦争で仕事が中断しても短期間であれば留守家族がその仕事をするので、必ずしも収入が大きく減少することはない。しかし、職人（鍛冶屋、大工、職布工など）が戦争のために仕事場を離れると、彼の収入は完全に途絶える。だから、彼が国家を防衛するために戦場に赴くならば、国家が彼を養わなければならない。これこそが製造業の発達した社会の特徴である。さらに、戦争技術が発達すると、戦闘期間が長期化するため、国家がその期間のあいだ軍務に服している人々を養わなければならない。こうして、製造業が発達し戦争技術が進歩した文明社会では、主権者または国家が軍事費を負担することになるのである。

しかしながら、社会が進歩し、戦争技術が高度化すると、人民は非好戦的になり、分業の成果である社会の富は隣国の侵略を挑発することになるといふ。なぜか。文明が進歩するにつれて、技術の中でも最も高度な戦争技術は複雑なものになり、技術的には最高水準のものになる。それに従事する者は、市民の特定階級の唯一主要な仕事になることが必要になってくる。スミスは分業が技術の進歩に役立ち、自分の利益にもなるという。すなわち、「分業は他のどんな技術の場合

にもそうだが、戦争の技術の進歩にも同じく必要だからである。分業が他の諸技術に導入されるときには、個々人の慎慮 *prudence* によって自然に行われる。個々人は、一つの特定の職業だけにつくほうが、あれこれたくさん手がけるよりも、自分の利益になるということがわかるからである」<sup>(4)</sup>。ところが、職業軍人を一つの独立した特殊な職業として確立するか否かは、国家の基本政策であるとし、ここでの主題である常備軍の設置を国家の在り方に帰着させている。私人としての市民が、民兵としての訓練を、平時に、自分の時間の大半を軍事訓練に費やすことは、技術の向上と精神の慰安を増加させることがあっても、その人自身の利益は増えない、とスミスはいふ。彼には、職業軍人と市民兵とを比較して、従事している仕事の目標を効率的に遂行する場合には利益が増加するという認識が見られのであるが、市民兵の訓練も利益になるようにしてやるのが、国家の叡智だという。これは何を意味しているのだろうか。彼は次のようにいっている。「軍人という職業を、他のいっさいの職業から独立した別個の一特殊職業となしうるのは、ただ国家の叡智 *wisdom* だけである。私人としての市民が、天下泰平のときに、特別に公の奨励もなしで、自分の時間の大半を軍事訓練に費やすとすれば、おおいに教練がうまくなることも、おおいに楽しめることもまちがいあるまいが、ただかれ自身の利益を増さないことは確かである。そこで、かれが自分の時間の大半を、この特殊な仕事につき込むことが、その利益になるようにしてやれるのは、国家の叡智だけである」<sup>(4)</sup>。つまり、スミスは、この段階で、職業軍人も市民兵となる者も国家の基本的な考え方如何によっては、自らの利益が増加するはずだと考えているのであろうか。

社会が進歩すると、国民は非好戦的となり、同時に、隣国から富の略奪を挑発されやすくなるとスミスはいふのであるが、それはどのような理由に依るものであると考えるのであろうか。閑暇 *leisure* の時間が牧羊者や農夫と職人や製造業者とは異なり、牧羊者や農夫の場合はいかの時間を軍事訓練に使っても損失にはならないが、職人や製造業者の場合には軍事訓練に使った時間の分ほど損失になる。地方の住民も技術が進歩すると農耕の改良も進むので、その分だけ閑暇は

少なくなる。こうして、都市の住民も地方の住民も共に軍事訓練のための時間を等閑視してしまうようになる。さらに技術の進歩によって社会の富が大きくなると、隣国からそれを略奪するための挑発を受けるようになる。勤勉で富裕な国民が一番襲われやすくなる。侵略されても人々は非好戦的になっているので、みずから防衛することが困難になってしまっている。だから、国家が社会を防衛する方策をとらなければならない。<sup>(5)</sup> このようにスミスは考えているのである。

分業の進展と社会の発展が人々を非好戦的にするため、社会の富を守るために国家が軍事力で外国の侵略から自国を防衛しなければならないことになる。その場合にスミスは軍備の方法論を展開する。それは、民兵が常備軍かという中枢の問題である。「国家が社会の防衛のために、一応なんとかなる程度の軍備をととのえる方法には、二つしかないように思う。すなわち、第一には、非常にきびしい政策をとって、人民の利害や天分や好みの傾向などすべてをおかまいなしに、軍事教練の実習を強制し、兵役適齢の市民全部、あるいはその一定数を、かれらがたまにどんな商売なり職業なりを営んでいるようと、ある程度まで軍人の職業を兼ねるように義務づけることができる。さもないければ、第二には、一定数の市民を養い、雇用して、軍事教練を常時実習させておくやり方で、軍人という職業を、他のいっさいの職業から独立した別個の一特殊職業とすることができるよう。もし国家がこれらの二方策のうちの第一にたよるならば、その軍事力は民兵に存するといわれ、第二にたよるならば、常備軍に存するといわれる。」<sup>(6)</sup> 民兵というのは兵役適齢期の市民全員に強制的に軍事教練を強制し、職業に関係なく一定数を軍人の職業と兼職にするという国家の軍事戦略としてはかなり厳しい政策であり、常備軍というのは国家が雇用した職業軍人の集団である。常備軍の軍人たちは、軍事教練が仕事であり、雇用主である国家が支払う給与で生計を維持する。民兵の軍人は、軍事教練は臨時の仕事であり、生活資金は他の仕事から得ている。したがって、スミスは、両者の性格について「民兵では、労働者、職人あるいは商人の性格が、軍人の性格にまさり、常備軍では、軍人の性格が、いっさいのほかの性格にまさる」というわけである。<sup>(7)</sup>

このような民兵と常備軍との本質的な相違はどのようにして生じたのであろうか。スミスは歴史の上で両者を確認して、その特質と優位性を考察している。彼は、民兵をいくつかの種類に分類する。古代のギリシャやローマ共和国の場合は、平時に市民各自が気の合った同輩などと軍事教練を実習するだけで、出征しない間は特定の部隊に編成されないし、独立した部隊に分かれて、各部隊ごとに特定の常任将校が指揮して教練を受けたわけではなかった。しかし、イングランドやスイスや近代ヨーロッパの国々の場合は、民兵は軍事教練を受けただけでなく、すべて民兵隊員は決まった部隊に配属され、特定の常任将校の指揮下で教練を受けた。すなわち、「近代ヨーロッパのその他この国でも、この種の不完全な軍事力をもっていたところでは、民兵隊員はすべて、平時でさえあるきまった部隊に配属され、特定の常任将校の指揮下で教練を受けたのである」<sup>(8)</sup>。火器が発明されるまでは身体の強さや敏捷さが戦闘の運命を決したが、火器が発明されてからはそれらの重要性は減り、火器という武器を使う腕前が一段と重要になった。この技術は大部隊で練習して習得する。しかしながら、こういう大部隊は規律と秩序及び命令に即座に従うことが、兵士が武器を使う腕前よりも、戦闘の運命を決めるうえできわめて重要な特質であるとスミスは考え、「規律、秩序、そして命令にたいして即座に従うという習慣は、大きな集団で訓練される部隊でないと身につかないのである」<sup>(9)</sup>というのである。

だが、民兵にこのような習慣が身についているのであろうか。スミスは、規律正しく訓練のいまとどいた常備軍にはかなわないという。常備軍の方が民兵より優れているという。それは何故であらうか。スミスは武器の操作のうまさよりも、即座に服従する習慣の方が近代の戦争では重要であるという。すなわち「週一回とか月一回とかしか将校に服従する義務がなく、ふだんはどんな点でも将校に責任を負わずに自分のことを自分流にかたづけする自由をもった軍人は、全行動を毎日、将校に指揮され、また毎日、将校の号令に従って起きたり寝たり、少なくとも営舎に引きあげたりしている軍人と同じようには、将校の前でかしまり、またいつもすぐに服従しようとする気持にはけっしてなれない。民兵はつねに、い

いわゆる軍規 discipline、つまり、いつもすぐに服従する習慣の点では、いわゆる筋肉訓練、つまり、兵器の操作と使用のうえで往々常備軍に劣るよりも、さらに劣っているにちがいない。だが、近代戦では、いつでも即座に服従する習慣のほう<sup>100</sup>が、武器の操作をかなり上手にやるということよりも、ずっと大きな重要性をもつのである。民兵は權威と服従の原理から比較的遠くにいて、あらゆる点について服従の義務や責任については自由に処理できる。したがって、軍規を重視するという点では、常備軍に劣る。常備軍の軍人は、毎日あるいは一日おきに訓練を受け、将校に指揮され、将校の号令に服従するのが責務となっている。權威と服従の原理が支配するのが常備軍の世界であり、近代の戦争においてはこの原理が中心となっている習慣の方が武器の操作のうまさよりも重要である。スミスは、そのことを歴史的に立証し説明する。

彼は、常備軍が民兵に比べて優位であるという場合の説明原理として軍律というキーワードを使う。とくにスミスがスコットランドのハイランドの民兵について記述している箇所は、興味深いものがある。それは既に述べたジャコバイトの乱の状況に関わるものである。すなわち「スコットランドのハイランドの民兵は、自分たちの首長のもとに率いられて軍務に服していたときには、これと同種の強み（權威と服従の原理が作用する常備軍のこと：筆者注）をいくぶんかもっていた。けれどもハイランド人は遊牧の民ではなくて定住して牧羊していたし、すべてきまった居住地をもっていた。平時には首長に従ってあちこち移動することに慣れていなかったから、戦時にかれに従って相当離れたところへ行くとか、長いあいだ戦場にとどまるとかいうことになる、…乗り気でなかった。なにか戦利品を手に入れると、かれらはひどく故郷に帰りがたり、首長には、かれらを引き止めるだけの權威はまずなかった」<sup>101</sup>。この文章は、ハイランドの民兵を主力とするジャコバイト軍がチャールズ・エドワードに率いられてイングランド領内に入り、首都ロンドン近くまで攻め入るが、望郷の念にかられて敗走する状況を念頭においた描写であろう。權威と服従の原理が機能しないのは、スコットランドのハイランド民兵には軍律が欠如していたし、軍事教練に慣れることも、武器を使う腕前も劣っていたということに由

来するものであろう。

しかし、スミスは、アメリカ植民地戦争を引き合いに出して、アメリカの民兵が何回も戦闘に参加すると、あらゆる点で常備軍になるということは、注意すべきことだという。「兵士たちは、毎日、武器を使う訓練を受け、また常時、将校の命令のもとに置かれていたため、常備軍のあいだで行われるのと同じ敏速な服従の習慣がついてくる。出征前になにをしていたかは、たいしたことではない。戦場でなんどかの戦闘をくぐりぬければ、かれらはあらゆる点で必然的に常備軍になってしまふ」<sup>112</sup>。農民と職人等から成るアメリカ民兵は、独立戦争の初期に大ブリテンの正規兵と八年にわたる戦闘状態にあった。その民兵は長い戦闘経験を重ねることによって、優秀な指揮者ワシントンとフランスの参戦に支えられて、大ブリテン軍を降伏させたのであるが、スミスは、この初期の状況を念頭においた説明で、「アメリカの民兵は、最近の戦争（一七五六から六三年の七年戦争：筆者注）で、少なくともフランスやスペインの最強のヴェテラン兵士たちにも劣らぬ武勇 valour を示したわが国の常備軍にたいする好敵手になるだろう」<sup>113</sup>と予測するのであった。こうして、彼は、歴史的なアプローチをして、あらゆる時代においては民兵よりも常備軍の方が圧倒的に優れていることを証明し立言しているのである。

そこで、国防は常備軍の軍事力に依存するのが国家の義務を一番良く果たすものであるという視座から、スミスの常備軍に関する言説を考察することしよう。その場合、彼は古代世界の文明国の没落の理由を細かく分析しているのであるが、その一貫した分析手法は厳正な軍規を身につけた常備軍が民兵を撃ち破ったことによって各文明国は滅びたという論理になっている。つまり、スミスは、常備軍の軍律という概念を分析の決定因子に用いることによって歴史に貫徹する共通の説明原理にしていることである。彼は常備軍の民兵に対する優位性を論ずるとき、人類史上三つの大変革を挙げる。すなわち、第一の大変革はギリシャ諸共和国とペルシャ帝国の没落であり、第二の大変革はカルタゴの没落とローマの興



隆であり、第三の大変革は西ローマ帝国の没落である。これらの体制変革は、民兵が次第に軍規を身につけて常備軍に発展し、常備軍が共和国や大帝国の民兵に勝利したことを歴史的に立証しようとしたものである。それは、「戦争の過程で、かれ自身の民兵は、必然的に軍律正しく訓練を積んだ常備軍になっていった」からだという認識である。<sup>(14)</sup>

もともと民兵は牧羊者と農夫であって、首長の指揮の下に出征し、戦時または平時をとわず、首長に服従し、良く訓練もされ、規律もかなり正しかった。しかし、分業が進み、技術と産業が進歩したと、民兵と首長との間にある権威と服従の関係が崩れてきた。これにとって代わったのが常備軍である。すなわち、「牧羊者と農夫の民兵であって、戦時には、平時にかれらが服従しつづけている、その同じ首長の指揮のもとに出征した。それだからこの民兵は、かなりよく訓練され、まあ、規律もかなり正しかった。ところが、技術と産業が進むにつれて、首長の権威がしだいに衰え、また人民の大部分は、軍事教練に割ける時間がなくなつた。そのために封建的民兵の規律も訓練もだんだんなくなってゆき、それにとって代わって、次第に常備軍が導入された」<sup>(15)</sup>。文明国がいったん常備軍を導入すると、近隣諸国は自国の安全を保障するのは民兵ではなく常備軍だと認識するようになる。平和を長期に享受していると、武勇の精神は衰退するものである。ミスは自国を例にして、次のようにいう。「二七三九年、スペイン戦争が始まったとき、イングランドは約二十八年にわって、まったくの平和を享受していた。しかし、わが兵士の武勇は、その長期の平和によって腐敗するどころか、あの不幸な戦争の最初の不幸な大戦果たるカルタヘナ攻撃（一七四一年：筆者注）において、空前の輝きを見せたのである。長く平和が続くと、将官は、ときにその指揮の技術をなおざりにするかもしれないが、軍律正しい常備軍がたもたれているところでは、兵士が武勇をなおざりにすることは断じてないと思われる」<sup>(16)</sup>。

文明国民が国家の防衛を民兵に依存すると、野蛮国に征服される危険性が常にあるという考え方は、『国富論』第五篇国家論の基調である。「軍律正しい常備軍は、いかなる民兵にもまさっている。そういう軍隊は、富裕な文明国民によって

もつともよく維持されるし、そこでまた、常備軍だけがそういう国民を、貧乏で野蛮な隣国の侵略から守ることができたのである。そえゆえ、どんな国の文明も、常備軍という手段によらないでは永続することができないし、あるいは相当の期間保持することさえできない<sup>(17)</sup>。一国の文明は民兵ではなく、常備軍の軍事力によって保持できるのが一般的な特質であるという。この言説は、ジャコバイトではないスミスがジャコバイトの乱において、イングランド正規軍によってスコットランドのハイランド民兵が敗北し、その後、スコットランドはイングランドと合併したことを念頭において書かれたものなのであろう。

そこで、野蛮国を文明化するためには、このような軍律正しい常備軍の軍事力を手段にする方策がとられる。常備軍のもつ軍事力を行使することによって、それに反抗する力を押え込み、封じ込んでいく。軍事力はいわばねじ伏せる力となつて野蛮国を統治し、統治者の主権を正義の法として施行していくのである。この例として、スミスは十七世紀後半から十八世紀前半のピョートル大帝のロシア帝国における施政を評価し、秩序と国内平和を維持できたのは、軍律正しい常備軍の軍事力が諸規制を実施し維持してきたからであつて、その軍事力に依存してきたことが、帝国の長期安定の基因であると考察するのである。<sup>(18)</sup> ここには、軍律正しい常備軍の軍事力を手段とした主権者の権力が、国内秩序と平和を維持するために、諸規制を強化していくという国家の基本構造を読み取ることが可能である。文明国民を防衛する正当な手段として常備軍を位置づけているスミス像が浮かび上がってくる。

この基軸は、しかしながら、市民的自由の問題とどのように関連づけて考えればよいのであろうか。この問題について、スミスはこのような常備軍は自由にとって危険でなく、むしろ逆に自由を維持するために有利な場合もあり得るという。例えば、シーザーの常備軍がローマ共和国を滅ぼした事例や、クロムウェルの常備軍がチャールズ一世が召集した長期議会の議員を議場から追放した事例を取り挙げ、この場合は自由にとって常備軍は危険であるという。つまり、これらは特

定の司令官とその主要な将校たちの利害関心を維持するために国家の基本構造を変更する必要があったからである、とスミスは考える。しかし、常備軍は自由にとって決して危険でないという。つまり、それは、主権が民政権によって反映されており、しかも常備軍が民政権を維持するのに最大多数の利害者の意向をもつ人々の指揮下にある場合だけである。スミスは「共和主義者は、常備軍は自由にとって危険なものだとして、疑いの目でみまもってきた」と看做して、シーザーの常備軍やクロムウエルの常備軍は自由にとって危険なものであると認識していた。もとより共和主義者が常備軍に反対しているのは、それが王権の議会支配の手段になるからであった。それに関しては一定の理解を示すスミスである。しかし、「主権者がみずから司令官で、その国の主だった貴族と郷紳 gentry of the country (landed gentry) 地主階級のこと（筆者注）が軍隊の高級将校になっているところ、言いかえれば自分自身、民政権 civil authority の最大の分け前にあずかっているがゆえに、軍事力が、民政権を維持することに最大の利害をもつ人々の指揮下に置かれているところでは、常備軍は自由にとって決して危険なものたりえない」という。主権者が自ら將軍で、国の主要な貴族階級と地主階級が常備軍の主要な将校であれば、自分自身が政治的權威にもっとも関与していることになるから、その政治的權威を維持する手段が常備軍である。スミスが、常備軍が自由にとって決して危険ではないという場合の意味は、このような内容なのである。『グラスゴウ大学講義』において、土豪 landed gentleman（地主階級）が指揮する民兵軍は国民の自由を危険にさらさないであろうと、述べていたことと符号するが、この場合の相違は民兵軍から常備軍に主役が変更になっていることである。

このように常備軍は自由にとって危険でなく、むしろ、逆に自由にとって有利な場合があるとスミスはいう。それは、放埒に近いほどの自由でも、主権者が軍律正しい常備軍によって国民の安全保障を維持している場合である。主権者は、軍律正しい常備軍が国家の安全保障に努めていると、国内における世論を無視しても国の運営は可能であるので、公共の

安全を目的に放埒なほどの自由を抑さえ込むことは不要であるという。すなわち、「その国の生え抜きの貴族層によってだけでなく、軍律正しい常備軍によっても支持されていると自覚している主権者なら、どんな乱暴な、根拠のない、放埒な抗議が出てきたとて、ほとんどびくともしない。かれは安んじてそれを許し、あるいは大目に見ることができし、自分のほうが優越しているということがわかっていいるから、自然そうしようという気にもなる。放埒に近いほどの自由は、主権者が軍律正しい常備軍によって安全を保障されている国々でだけ許されうる」<sup>(21)</sup>と。もし軍律正しく良く統制のとれた常備軍がなければ、為政者のやり方に不満や異義申し立てや騒動が起きた場合には、政府は自らの権威が侵害されたとして、民衆を監視したり抑圧しなければならぬ。常備軍に国が守られているからこそ、そのような必要性はないという。したがって、「その社会を、ほかの独立社会の暴力と不正から防衛するという主権者の第一の義務は、その社会が文明化するにつれて、次第にますます高くつくようになる。本来は、平時戦時を問わず、主権者にはなんの費用もかからなかった社会防衛のための軍事力は、社会の改良が進んでくると、はじめは戦時に、のちには平時にも、主権者によって維持されざるをえない」<sup>(22)</sup>。こうして、スミスは国防の問題を国家経費の問題に発展させていくのである。かくして、彼は次のようにいうのである。すなわち「近代の戦争では、火器に要する経費が大であるから、この経費をもっとよくまかなえる国民が明らかに優位に立つ。また、したがって、富裕な文明国民は、貧乏な野蛮国民よりも明らかに優位に立つ。…火器の発明は、一見はなはだ有害のように見える発明だが、これは文明の永続と拡大の両方にとってたしかに好ましい」<sup>(23)</sup>と。まさに、分業を社会発展の原理とする文明社会が永続し拡大するためには、近代的な武器を中核にした戦争技術は必要不可欠であるというのがスミスの考え方である。

## (二) 教育と武勇の精神

分業が発達し、技術と産業が進むと、国家は民兵よりも常備軍に依存することによって安全保障を維持するようになる。分業の発達には戦争技術の進歩を喚起し、国家は戦争に従事する軍人という職業を独立した職種にする方が技術的にも国家経済的にも合理的であると認識するようになる。しかしそうになると、職業軍人以外の国民の大部分は非好戦的となり、分業の生産力効果によって農業や製造業で作られる社会全体の富は増加するので、国民は富裕になるけれども、それだけ諸外国からの侵略を挑発することになる。したがって、これを防ぐために国家は国民に武勇の精神を鼓舞する必要性が生じてくる。こういう思考の流れが『国富論』には見られるのである。分業が発達すればするほど、国民の間には、非好戦的な意識が蔓延し拡大する。このような情況に対して、スミスはどのような方策を考えるのであろうか。

ところで、分業が発達し、大多数の人々が単純作業に従事するようになって、種々の困難が生じたとき、彼等はそれらを除去したり便法を発見したりするために自らの理解力や発明力を働かせる努力をするのであろうか。答えは否である。すなわち、スミスは次のようにいっている。「分業の発達とともに、労働で生活する人々の圧倒的部分、つまり国民大衆のつく仕事は、少数の、しばしば一つか二つのごく単純な作業に限定されてしまふようになる。ところで、おおかたの人間の理解力というものは、かれらが従っている日常の仕事によって必然的に形成される。その全生涯を、少数の単純な作業、しかも作業の結果もまた、おそろくいつも同じか、ほとんど同じといった作業をやることに費やす人は、さまざまの困難を取り除く手だてを見つけようと、努めて理解力を働かせたり工夫を凝らしたりする機会 occasion が<sup>24</sup>ない」と。ここにみられるように分業に基づいた単純作業は同じことのくり返しであるから、その過程で起きる障害は除去しなければならな

い筈であるが、そのようなことに対して単純労働者は自らの理解力を働かして工夫したり発明したりする機会がないという。理解力や発明力を発揮する機会がないという意味は、スミスによれば、同じ作業のくり返しである単純作業だから、そのような障害や困難は決して起きないことである。しかしながら、以前に彼は分業の有益な側面を高く評価し、分業の発達が国民を富裕にする社会発展の原動力であると強調していたのであるから、これは自らの言説と論理的に矛盾するのではないかという疑問が生ずる。

そもそも、分業には良い面があった。『国富論』第一篇の第一章、第二章、第三章は、分業が労働の生産性を改善する原因であると規定していた。「労働の生産力における最大の改善と、どの方向にであれ労働をふりむけたり用いたりする場合の熟練、技能、判断力の大部分は、分業の結果であつたように思われる」として、分業が生産諸力を増大させる最大の原因であると説明しているのである。既にスミスは、『グラスゴウ大学講義』第二篇第四節「分業はいかにして生産物を増加させるか」において同様の考え方を展開していたのであった。さらに、分業の発達が富裕の基礎的条件を構成するのは、労働が分割され、仕事が細分化した部分労働を社会的に結合するからであった。スミスは工場内の分業を労働の分割として把握すると同時に、その労働分割を社会全体に拡大して理解し、それが社会内の分業を促進し、職業の分化を引き起こすと考えている。工場内の分業によって当該工場の生産力が増進すると同時に、それらの各労働が社会的に結合することを通して、一国あるいは一定の地域社会の内部で職業の分化を引き起こす。作業の分割が職業の分化を喚起し、それらが社会的に結合し、技術の発達した商業社会を確立するのである。

分業の結果は仕事量の増加を招来するのであるが、この原因について、スミスは次のようにいう。「分業の結果、同じ人数のものがつくり出すことのできる仕事の量がこのように大きく増加するのは、三つの異なる事情にもとづいている。第一は、個々の職人すべての技能の増進、第二には、ある種の仕事から他の仕事へと移る場合にふつう失われる時間の節約、

そして最後に、労働を促進し、短縮し、しかも一人で多くの仕事がやれるようなさまざまな機械の発明、にもとづくのである<sup>(28)</sup>。技巧の増大、時間の節約、機械の発明の三つの事情が分業効果として機能し、生産物が増加する。分業こそは財産の不等等にもかかわらず、社会の最下層の人々にまで物質的富が行きわたり、人々は富裕になる。分業の生産力効果によって、社会の全労働の生産物が潤沢に供給可能となるので、勤勉で節儉の最下最貧の職人でさえ、どのような野蛮人が獲得しうるよりも豊富に生活必需品と便益品の分け前を享受できるのである<sup>(29)</sup>。しかも、「人は、その精神の全注意を単一の目的に向けているときのほうが、さまざまな事物に分散させておくときよりも、目的達成上、いっそう容易で手っとりばやい方法を発見する見込みがずっと大きい。ところで、分業の結果、各人の注意力は、自然に、ある一つのごく単純な目標に向けられることになる。そこで、とうぜん期待されることであるが、仕事の性質上改善の余地のあるところでは、労働の個々の部門に従事する人々のうちのだけれが、自分たちの個々の仕事をいっそう容易に手っ取りばやく行なう方法をまもなく見つけだすだろう。労働がごく細分されている製造業で使用する機械の大部分は、もとはといえば、普通の職人が発明したものであったのである。これらの職人たちは、各自が非常に単純な作業に従事していたために、その作業がいっそう容易で手っ取りばやく行なえる方法を発見することに、自然に思いをめぐらすようになる<sup>(30)</sup>」。

人間は分業の結果、各人の全注意力は労働の特定部門に集中するから、作業効率をあげるために省力化の諸方法を工夫していくのである。スミスは、『グラスゴウ大学講義』においても「疑いもなく、分業によってはじめて機械の発明が生じ、人の一生の仕事が二つ三つの事を遂行するだけだとすれば、彼の心の傾向は、それを行うべきもっとも賢明な方法を発見するであろう。しかるに、彼の精神力が分散せしめられる場合には、彼のこのような成功を期待することはできない」と説明していたのである<sup>(31)</sup>。ところが、『国富論』第五篇の国家論における教育財政論では、分業が発達すると、労働者は精神的に無知になり、愚鈍になるから、発明に対する能力も必要なくなってくると論じ、とくに、文明社会においては、すべ

ての下層階級の大衆が無知や愚鈍になるのは分業によって不具や奇形になるからであるという。そうであるならば、『国富論』第一篇における分業論と第五篇において展開している分業論とは矛盾した見解ではないかという疑問が生じてくることは否めない。

スミスは『国富論』第五篇の教育財政論において、分業が発達すると、大部分の労働者は日常的に単純作業を反復し、仕事の過程で困難な事が生じててもそれを除去しようとする手立てや工夫を見つけようとする理解力を働かせようとしなくて彼の全生涯を終える、という趣旨のことを述べていた。そして、次のようにいうのであった。「こういうわけで、彼は自然にこうした努力をする習慣を失い、たいていは神の創り給うた人間としてなり下れるかぎり愚かになり、無知になる。その精神が麻痺してしまうため、理性的な会話を味わったり、その仲間に加わったりすることができなくなるばかりか、寛大で高尚な、あるいはやさしい感情をなにつ抱くこともできなくなり、結局、私生活のうえでの日常の義務についてさえ、まったく判断が下せなくなってしまう」<sup>30</sup>。分業の発達によって、労働者は無知になり愚鈍になる。単純作業から生じる労働の単調感、寛大で高尚な精神をもつことができなくなり、国民としての判断力も喪失するというある種の精神的疎外感を呼び起こすのである。そして、一層深刻なことには、「自分の国の重大で広範囲な利害についても、まったく判断が立たない」状況になるという<sup>31</sup>。これと同じことは、分業が発達した「文明社会で、すべての下層階級の人々の理解力を往々にして麻痺させているように思われる、ひどい無知や愚昧についても言えよう。人間としての知的能力をまともに使えない人は、できれば、億病者以上にさえ軽蔑すべきであって、人間の本性の特質のうち、億病者よりさらに肝心な一面において、片輪であり畸形なのだと思われる」<sup>32</sup>。たしかに分業による労働の細分化が社会的規模で進行すると、社会の下層階級の人々の理解力は麻痺せざると得ないことも十分あり得ることである。分業が労働者の精神的及び知的沈滞を招くとしても、それが技術的發展を阻害するわけではない。むしろ、分業が増大する直接の結果として、労働貧民つまり一般大衆の



創造力は衰弱するけれども社会全体としてみれば生産力の増大によって社会の創造力は増大するという側面も否定できない。<sup>33)</sup>

しかし、スミスが分業は労働者を墮落させると考える場合、そこに分業によって労働者が不具になり畸形化する状態を指摘しているわけであるから、その状態は、ひとつの疎外された状況であると認識できるのである。社会全体の無知や愚鈍は分業化した工場制度から生じたことであり、それは資本の要請に基づく結果であった。資本の強制によるこのような労働者大衆の無感動あるいは無関心の状況は、分業による生産力効果の裏面としての意味あいをもつことになる。<sup>34)</sup> スミスは、徹底して、分業が引き起こす有害な効果を槍玉に挙げている。この有害な効果が国民の勇敢な精神あるいは武勇の精神を衰退させる根源であると把握する。この傾向に対してどのような方策を取れば良いのであろうか。文明の発達した産業社会の深刻な社会問題に対して彼は次のようにいうのである。「かれをたたき直すために、よほど特別の骨折をするのならいざ知らず、戦争になっても、かれは自分の国を護ることが、これまたできない。淀んだようなかれの生活は十年一日のごとく単調だから、自然に勇敢な精神も朽ちてしまい、そこで、不規則不安定で冒險的な兵士の生活を嫌悪の眼で見られるようになる。単調な生活は、かれの肉体的な活力さえも腐らせてしまい、それまで仕込まれてきた仕事以外は、どんな仕事につこうと、元氣よく辛抱よく自分の力を振るうことができなくなってしまう。自分自身の特定の職業での手際というのは、こういうふうにして、かれの知的な、社会的な、また軍事的な美徳の犠牲において獲られるもののように思われる。これこそ、進歩した文明社会ではどこでも、政府がなにか防止の労をとらぬかぎり、労働貧民、つまり国民大衆の必然的に陥らざるをえない状態なのである」<sup>35)</sup>。戦争になっても自分の国を護る氣概が生まれないのは、軍事的な美徳を犠牲にして、労働者が特定の職業の技巧を身につけてきたからである。細分化した労働は単調で、生活も酒食にふける単純なものに成り下がり、身体の活力も萎え、勇敢な精神も衰退してしまう。国民大衆は愚鈍になり、社会的な意識もうすれ、武

勇の精神を維持するのが困難になってくる。

分業を社会発展の原理とする進歩した文明社会において、国民大衆が知的・社会的・軍事的美德を喪失することは国家の基本にとって重大問題となる。彼等がこの墓穴に陥らないようにしなければならない。これこそが政府の仕事である。その具体的な防止策が教育であるとスミスは考える。とくに、彼は、庶民 *common people* の教育が重要であるとする。その場合、古代ギリシャやローマの共和国が武勇の精神を維持した事情を分析して、次のようにいうのである。「あらゆる社会の安全は、多かれ少なかれ、いつでも国民大衆の武勇の精神に依存するにちがいない。なるほど、現代では、ひとりそうした武勇の精神だけでは、それが軍律正しい常備軍に支えられていないかぎり、どんな社会であろうと、その防衛と安全保障にとって、おそらく十分ということはなからう。けれども、市民ひとりひとりが軍人精神を持っているところでは、割に小規模の常備軍しか必要としないのは確かであろう。そればかりか、この精神は、普通、常備軍について危惧されている自由にたいする危険——それが現実的なものか、想像上のものかはともかく——を、かならずや大幅に減少させるだろう。この精神は、外敵の侵略にたいする軍隊の作戦行動をおおいにやりやすくすると同様、軍隊が、もし万一、不幸にも国家の基本制度に反抗するような場合には、等しくおおいにその行動を阻むであろう」。<sup>30</sup> 古代ギリシャやローマ共和国の時代と異なり、スミスの時代においては軍律正しい常備軍が国家の防衛と安全を保障するのであるが、逆に常備軍が市民的自由を侵害する危険性もある。これを最小限に阻止するためには、国民大衆が武勇の精神、つまり軍人精神を保持する必要がある。なぜならば、もし、常備軍が体制転覆のような国家の基本制度に反抗するようなことが勃発した場合、国民大衆に武勇の精神つまり軍人精神が具備されておれば、そのような行動を阻止できるはずであるという。しかし、かりに国民大衆の武勇の精神が社会防衛に抗力がなくとも、国民精神に見られる臆病、精神的不具、奇形、卑劣さといった精神が社会に拡散するのを防ぐ力になることは重要な点である。その防止策は政府がやるべきであると力説する。つまり、「か

りに人民の武勇の精神が、その社会の防衛にとってなんの役にもたないとしても、臆病にかならずふくまれている、この種の精神的な不具、畸型、卑劣が国民大衆のあいだに拡がってゆくのを防ぐことは、やはり政府のもっと真剣な配慮に値しよう<sup>(39)</sup>。とくに、スミスは、国家が国民の下層階級のために教育する必要性を強調して、次のようにいう。理解力が麻痺し、ひどい無知や愚昧は臆病者以上に軽蔑すべきあり、それは精神的に片輪であり畸型である。「かりに、国家は、国民の下層階級を教育しても、なんの利益があがるものではないとしたところで、かれらをまったく無教育のままにしておかないようにすることは、やはり国家の配慮に値しよう。ましてや、国家は、かれらの教育によって少なからぬ利益をあげるにおいてをや」である<sup>(40)</sup>。資本の生産力をあげるための規則の強制によって労働疎外が生じたが、今度は、国家がその矯正にあたることによって国民大衆に武勇の精神を保持させるという構図である<sup>(41)</sup>。

スミスは古代の教育機関の例証としてローマとギリシャ諸共和国を挙げ、そこでは公共の行政官の指揮の下ですべての自由市民が体育と音楽とを教育され、教育の目的は、市民に軍事的奉仕の準備をさせることによって社会的道德的義務を果たす気概をもたせるように仕向けることであつたという<sup>(42)</sup>。おそらくこのような例証は、スミスが同時代の庶民教育の目標を考える上で重要な指標になるものであつた。つまり、市民的自由と社会的規範を構築する上での歴史的解説を試みたものであろう。彼はスコットランドの教区学校の制度を考察の対象にする。「スコットランドでは、こうした教区学校の制度が、庶民のほとんど全部に読むことを教え、また、その大部分に書くことと計算とを教えてきた<sup>(43)</sup>」。この読み、書き、計算という教育の基本的部分に加えて、幾何学と機械学の初歩を教えるならば、下層階級の人々の学問教育はほぼ完璧に近いものなると主張する。この基礎的な部分を身につけてから、「職につけば、庶民は、もっとも実用的な学問はもちろんのこと、もっとも高尚な学問にとっても、必ずくぐらなければならない入門であるこれらの原理を、だんだんに仕込まれ身につけていくに相違なからう<sup>(44)</sup>」。スミスは、基礎から実用、実用から高尚な学問への広がり指摘するのであるが、その費

用について「国はごくわずかの経費で、国民のほとんど全部に、教育のこうしたもつとも基本的な部分を修得することを、助け、奨励し、さらには必須のもととして義務づけることさえできる」という。<sup>(43)</sup>この場合に、基本的な部分の修得を助け、奨励し、必須なものを義務化するという意味は、国が国費でその費用の一部を負担することによって普通の労働者でも払える安い謝礼で教えてもらうようにすることであるし、また、基本的な分野の修得を奨励するためには、国が優秀児に少額の賞金や表彰を授与できるようにすることである。こういう政策によって国は庶民に対して教育の基本的な部分を義務化していくわけである。

このような考え方は、古代のギリシャ及びローマ諸共和国を模倣したもので、スミスはこれらの国家の基本制度をモデルにしてこの問題を考察している。すなわち、「ギリシャとローマの共和国が、市民それぞれの武勇の精神を維持したのは、このようなやり方で、すなわち、市民たちの軍事訓練、体育訓練を助け、奨励し、さらには、国民全体に、これらの訓練を受けることを必須のものとして義務づけさせることによってであった」<sup>(44)</sup>。スミスは古代のギリシャとローマ諸共和国の制度が国民大衆の武勇の精神を維持するのにおおに貢献していたと認識している。したがって、民兵制度と結びつけて考えると、近代では、政府が軍事教練の実習を支持する適切な努力をしなければ、それは廃れてしまうと警告するわけである。なぜならば、古代の教育目的は、「精神を豊かにし気性を柔らげて、自由市民が公私両方の生活におけるすべての社会的・道徳的義務を果たそうとするように仕向けることであった」<sup>(45)</sup>からである。こういう古代の民兵制度に対するスミスの強い憧憬は、近代の民兵制度の不完全さから生まれたものというべきであろうし、なによりもそれは国民大衆に武勇の精神を涵養させるための積極的な提言であったのである。

## 註

- (1) Wealth of Nations, II, p. 187, 訳Ⅲ五頁。

- (2) Wealth of Nations, II. p. 188. 訳Ⅲ六頁。
- (3) Wealth of Nations, II. p. 190. 訳Ⅲ九頁。
- (4) Wealth of Nations, II. p. 192. 訳Ⅲ一二頁。
- (4) 『国富論』第五篇の訳者はスミスの国防問題の位置づけを次のようにいう。「文明社会における国防問題は、利己心にもとづく分業という文明社会の大原理にたいする顕著な例外をなしている。……国防にかんしては、私人の利己心と慎慮は無力であり、私人の利己心を誘導する叡智が必要なのである」訳Ⅲ一二頁の注①。
- (5) ibid., 訳Ⅲ一二頁、参照。
- (6) Wealth of Nations, II. pp. 192-193. 訳Ⅲ一四頁。
- (7) Wealth of Nations, II. p. 193. 訳Ⅲ一四〇一五頁。
- (8) Wealth of Nations, II. pp. 193-194. 訳Ⅲ一五〇一六頁。
- (9) Wealth of Nations, II. p. 194. 訳Ⅲ一七頁。
- (10) Wealth of Nations, II. p. 195. 訳Ⅲ一七〇一八頁。
- (11) Wealth of Nations, II. p. 195. 訳Ⅲ一八頁。
- (12) Wealth of Nations, II. p. 195. 訳Ⅲ一九頁。
- (13) Wealth of Nations, II. p. 196. 訳Ⅲ一九〇一〇頁。
- (14) Wealth of Nations, II. p. 197. 訳Ⅲ二三頁。
- (15) Wealth of Nations, II. p. 199. 訳Ⅲ二五〇二六頁。
- (16) Wealth of Nations, II. pp. 199-200. 訳Ⅲ二六頁。
- (17) Wealth of Nations, II. p. 200. 訳Ⅲ二七頁。
- (18) Wealth of Nations, II. p. 200. 訳Ⅲ二八頁、参照。
- (19) Wealth of Nations, II. p. 200. 訳Ⅲ二八頁。
- (20) Wealth of Nations, II. pp. 200-201. 訳Ⅲ二八頁。
- (21) Wealth of Nations, II. p. 201. 訳Ⅲ二九頁。
- (22) Wealth of Nations, II. p. 201. 訳Ⅲ三〇頁。重商主義国家が商業覇権を掌握するために行う戦争や従属国を獲得するための植民地獲得戦争には巨額の戦費を要し、政府はその資金調達方法として公債を発行するのであるが、これについては、拙稿「アダム・スミスの公債批判論」『星葉科大学一般教育論集』第十輯（一九九三年）を参看。

- (23) *Wealth of Nations*, II, p. 202. 訳Ⅲ二二頁。
- (24) *Wealth of Nations*, II, p. 267. 訳Ⅲ一四三頁。
- (25) *Wealth of Nations*, I, p. 5. 訳一八九頁。なお、スミス分業論の特質については、拙稿「スミス分業論における経済学と社会学」『星  
葉科大学紀要』第二〇号（一九七八年）を参看。
- (26) *Wealth of Nations*, I, p. 5. 訳一五〇一五六頁。Draft, pp. 333-334. LJ (B) pp. 166-168. 訳二二九〇三三二頁参照。
- (27) *Wealth of Nations*, I, p. 12. 訳一二〇頁。拙稿前掲論文、一一頁参照。
- (28) *Wealth of Nations*, I, p. 11. 訳一八頁。
- (29) LJ (B) p. 167. 訳三三三頁参照。
- (30) *Wealth of Nations*, II, p. 267. 訳Ⅲ一四三頁。
- (31) *ibid.*
- (32) *Wealth of Nations*, II, p. 272. 訳Ⅲ一五二一五三頁。
- (33) ローゼンバーグは、この観点からスミスの分業論には矛盾は存在しないと云う（N. Rosenberg, *Adam Smith on the Division of  
Labour: Two View or One?* in *Economica*, May, 1965, pp. 134-137）。
- (34) E. G. West, *Adam Smith and Alienation: Wealth Increase, Men Decay?* in *Essay on Adam Smith*, ed. by A. S. Skinner and  
T. Wilson, Oxford, 1975, p. 549. 同く E. G. West, *Adam Smith Two on the Division of Labour in Economica*, Feb., 1964, p.  
31. 同く E. G. West, *Adam Smith and Alienation: A Rejoinder in Oxford Economic Paper*, Vol. 27, No. 2, 1975, p. 298. また、  
生産力分業のなかに資本の強制が隠蔽されていることについては、内田義彦『増補 経済学の生誕』未来社、一九八二年、一〇三  
頁、『内田義彦著作集』岩波書店、一九八八年、第一巻、一八二頁。参照。
- (35) *Wealth of Nations*, II, pp. 267-268. 訳Ⅲ一四三一一四四頁。
- (36) *Wealth of Nations*, II, p. 271. 訳Ⅲ一五一頁。
- (37) *Wealth of Nations*, II, p. 272. 訳Ⅲ一五二頁。
- (38) *ibid.* 訳Ⅲ一五三頁。
- (39) なお、大学教育に関するスミスの見解については拙著『アダム・スミス管見—経済学の古典研究』近代文藝社、一九九三年、を参  
看。
- (40) *Wealth of Nations*, II, pp. 261-262. 訳Ⅲ一三四頁。
- (41) *Wealth of Nations*, II, p. 270. 訳Ⅲ一四八頁。

- ibid.  
 (42) Wealth of Nations, II, p. 270. 訳Ⅲ一四七～一四八頁。  
 (43) Wealth of Nations, II. 訳Ⅲ一五〇頁。  
 (44) Wealth of Nations, II, p. 261. 訳Ⅲ一三四頁。  
 (45) Wealth of Nations, II, p. 261. 訳Ⅲ一三四頁。